

最後の小説、発表から4年…ノーベル賞作家「苦悩の今」

目撃撮!

大江健三郎



ノーベル文学賞受賞の際、夫婦が胸中を語っていた



病院を訪れてから約1時間後、妻らと自宅へ戻っていった

酒瓶の山と 神経症の山と 療法の山と 通院の山と

目撃

大江氏はゆかり夫人とあまり会話をせず座ったままうつむいている。そして再びタクシーに乗り込むと、自宅へと戻っていった。

ノーベル賞作家・大江氏はもう小説を書かないのだからか。本誌はその心境を聞くべく、自宅へ向かった。7月下旬のお昼ごろ、自宅から出て

きた大江氏に声をかけた。
——大江先生、突然申し訳ありません。
記者の問いかけに、「はい」と言って足を止める大江氏。「女性自身」の記者であると明らかになった。
「いえ、悩んでおりません」
——お酒の量が増えているとお聞きしましたが……。
「お酒もあまり飲みません。(妻も)心配しておりません。私たちは健全です」
その後も質問を続けようとしたが、名刺を受け取ると足早に去っていく。大江氏の声は始終力強く、治療への不安は感じさせなかった。
戦前に活躍した劇作家・倉田百三氏は強迫神経症に悩んでいたという。だが森田正馬氏に「作品を書き続けるように」と説かれ、「36年に名作『親鸞』を書き上げた。
作家であるがゆえの苦悩を解放したものは、ほかでもない『書く』という行為だったのだ。

女性自身

'94年にノーベル文学賞を受賞した作家、大江健三郎氏。'13年に、最後の小説『を上梓してから4年、新たな小説は発表されていない。そんななか、心配な声』が――

7月下旬の朝、都内にある大江健三郎氏(82)の自宅前には一台のタクシーが止まっていた。
妻・ゆかりさん(81)と同伴女性に連れられて、車の中へと乗り込んだ大江氏。そのまま15分ほどタクシーを走らせた。
向かった先は、都内の大学附属病院だった――。
大江氏といえば言わずと知れた、日本を代表する文豪だ。57年に作家デビューすると、翌58年に23歳で芥川賞を受賞。以降も数々の賞に輝き、94年にはノーベル文学賞を受賞している。
だが、後年は幾度となく小説の世界から遠ざかろうとしてきていた。
'95年には、自身、最後の小説

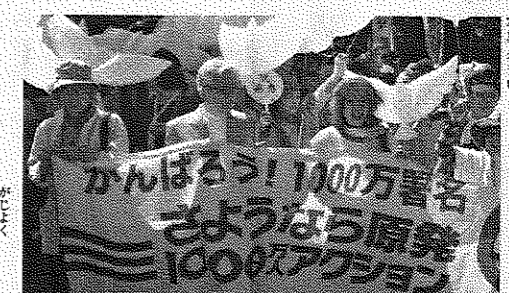


本誌の直撃取材に力強く答えた大江氏だが……

も、何度も筆を執ってきた大江氏。だが『晩年様式集 イン・レイト・スタイル』以降の約4年間、新しい小説は発表されていない。
そんななか実は、大江氏にある、心配の声。がささやかれているという。
「大江さんは『晩年の仕事をどう完結させるのか』と葛藤を抱え続けており、近年は『もう書けないかもしれない』と悩んでいたそうです。
大江さんはもともと外に出てストレスを発散させるようなタイプではありません。最近では自宅が好きで日本酒やビールを一人で飲む時間が多くなり、奥さまも大江さんの体を心配しているみたいですよ……」(大江氏の知人)
7月下旬、自宅玄関先には資源ごみとして大量のビールの空き缶や日本酒の空き瓶が置かれていた。
翌日、冒頭のように都内の大学附属病院を訪れていた大江氏。彼らが迷うことなく向かったのは、院内にある精神神経科施設。
そこには「森田療法」と書かれていた。
「あるがまま」に受け入れて……
森田療法とは、1919年に精神科医・森田正馬氏(享年64)が確立した神経症に対する精神療法。対人恐怖や広場恐怖などの恐怖症、強迫神経症、不安神経症などが主な治療対象となっている。
また近年では慢性化するうつ病や、がん患者のメンタルケアなどの分野でも用いられるという。
同療法を行っている「クリニック西川」の西川嘉伸院長はこう語る。
「恐怖や不安は、よりよく生きようとする欲望と表裏一体。人間誰もが持つ自然な感情です。しかし神経症に陥る人は不安や恐怖を、あつてはならないもの」として排除しようとする。この療法は「仕事や思うようにできない」と不安や悩みを抱える人、あがり症の人やひきこもりの人、不安から酒量が増えてしまった人などが相談に訪れるという。
西川院長が、治療法について続ける。
「森田療法は、本来的には入院治療です。不安や恐怖を『あるがまま』に受け入れるべく病室で横に

「あるがまま」に受け入れて……
森田療法は「仕事や思うようにできない」と不安や悩みを抱える人、あがり症の人やひきこもりの人、不安から酒量が増えてしまった人などが相談に訪れるという。
西川院長が、治療法について続ける。
「森田療法は、本来的には入院治療です。不安や恐怖を『あるがまま』に受け入れるべく病室で横に

なつて過ごす『臥褥期』、庭に出て自然に触れる『軽作業期』、日常の共同作業や動植物の世話をする『作業期』、外出や外泊をしたり病院から職場や学校に通う『社会復帰期』の4期からなります。
ただ今は、入院形式の森田療法を行うところはほとんどありません。そうした考え方を基礎に、薬物治療と併用する医師が多いです。
外来治療では、カウンセリングと日記療法などを行います。文字にすることで、自分が漠然と思っていることを再認識するのです。入院治療では依存しないよう患者を家族から切り離しますが、もちろん家族の理解がないと改善は難しい部分もあるでしょう」
本誌が目撃したこの日、約1時間後に施設から出てきた大江氏たちは会計窓口へ。
同伴女性が対応している間、



東日本大震災後は反原発の活動にも参加するように